

がないのであるが、Radcliffe-Brown らのいう静態的な社会構造を強く否定し、動く現実を写しとろうとする。この社会構造に対する根本的な把握から、イギリス人類学者が社会構造の中核と見なしてきた親族組織を Leach の立場から解明する。すなわち、素人にとってはごくあたりまえのことではあるが、親族原理がそれ自身で働いているのでもなく、なおさら親族組織が他の社会の諸制度を規制するものではないということである。

このような分析のために、第2章で歴史的、社会的な背景を比較的大局的にとらえ、第3章で土地利用の状況を説明した後で、親族組織に関して第4章をあてている。さすがに一流の学者らしく短いが要を得た説明である。しかし著者の目は、この親族組織にそそがれているのではなく、すでに第5章以下の土地所有制度に向いている。いわば親族組織までの4章が後の数章の説明の為の前置きともいえる。

第5章では「伝統的な土地」における土地所有制度、第6章では、それ以外の新しい土地の土地所有制度の詳細な説明と、実際に後づけの可能な1890—1954年の間の土地相続を1件ずつ記述している。この2章はもっとも読みにくい、本書の中核をなす部分である。

第7章では、労働に関する人間関係を土地の種類によって記述分析している。(前田成文)

Tjoa Soei Hock: *Institutional Background to Modern Economic & Social Development in Malaya (with special reference to the East Coast)*, Liu & Liu Agency, Kuala Lumpur, 1963. xxiii+283p.

著者 Tjoa Soei Hock (蔡瑞福)氏は評者の Malaya 大学訪問の際(1961)面識のある人で、当時 Malaya 大学の Malay Studies の講師をしていた人であり、また当時同大学の唯一の人類学者であった。氏は Indonesia の Sibolga に生まれ、中学および大学教育をオランダで受けた後一時中国に帰り、1956年再びオランダに渡り1958年いわゆる Non-Western Sociology & Economics を卒業した。Doctorandus (M. A. にあたる)をユトレヒト大学で受け、更にハーグの Institute of social studies で

1960年 M. S. S. を得た。主として後進国の社会と経済の研究をなして1963年ユトレヒト大学から Dr. の学位を獲得した。

評者の今次のマラヤ研究に際しては、再会と多少の調査協力の期待をして来たのであったが、氏はこの学位論文をその著書として残してマラヤを去り、三たびオランダに渡り、現在ハーグにある。

本書に見える著者の主要な Idea は、後進国の経済的發展は社会的な發展なくしてはあり得ない。この社会發展は社会制度の機能であり、社会制度とはその性格において、調整され、目的的であり、かつ反覆的な活動である。この社会制度は全体的な文化統合の一部であって、経済的な要素よりもフレキシビリティが遙かに少ない。だから経済發展だけを企劃し、西洋的な経済發展計画をおしつけようとしても、容易に受け入れられるものではない。ということにあるようである。

マラヤは周知のような複数社会の国であり、また複数民族国家である。マライ人と中国人とインド人がその主な構成民族であるが、マライ人、なかんずく東岸部のマライ人は後進性が強いという。彼らは同じ農業を行なっても中国人の如く働かず、低所得である。金銭を貯蓄して投資せず、金銭があれば黄金や宝石に変え、多額の金銭を結婚式、祖先祭、誕生祝などの Kendury (祭宴)に消費してしまう。このマライ人に経済的な發展のみを強制しても無理である。祭宴に多額の金銭を消費するのは馬鹿げて見えるけれども、それはイスラムの与える人生観、世界観と関係しているので、その調整を計らなければならぬと説いている。著者は極めて政治意識的であってこのような調整を計る發展計画委員にはイスラム神学者をはじめ、かくかくの専門家を加えよというような提言まで行なっている。また貯蓄に関してはイスラムが riba を高利貸として禁じ、利子の観念までを否定することに対しては神学的な再解釈までを要求するのである。

評者は本書の副題にある如く、特にマラヤ東岸に関連してと言う言葉につられ、東岸部の四つの村の実態調査が行なわれ、本書のはじめに四つの村の地図まで挿入してあるので、村落研究の参考になると考えて読みはじめた。なるほど本文中にこれらの村落について触れてあることはあるが、その調査というのはそれぞれ極めて短期間の学生と共に行なった村民とのインタビューだけであつたらしく、村落研究らしい記述は

ほとんど見当たらない。著者は常にマラヤ全体を意識し、マラヤの政策と経済と社会を国の全体的な統計を引用しつつ論じている。その意味で人類学の常識を遙かに越えた書物で、むしろマラヤの政治家やマラヤに投資せんとする資本家の好参考となるかと思われる。

勿論評者にとっても、マラヤについて本書から教えられるところは多々あるし、マラヤをよく知る者になければ書けない著書であるけれども、資料の集め方や基礎的な調査にそれ程の努力が払われていないのではないかという印象をうけざるを得なかった。

(マラヤにて、棚瀬襄爾)

**梅棹忠夫：「東南アジア紀行」中央公論社
1964. 374p.**

現在のベトナム、ラオスにおける政治的な不安定さは、著者らが1957年から58年にかけてこころみたようなインドシナ半島全域にわたる広汎な旅行を、一般にはほとんど許さないであろう。当時、反日的である、国情が不安定であるなどといううわさを耳に、緊張してカンボジアからベトナムに入ったとき、それらの不安は一掃され、あちこちで人々の歓迎と協力をうけたという。北ベトナムとの停戦ラインちかくを、ラオスへ山越えするのは、勇気のいることであつたらう。「やってみることだ。ベトコンにつかまったら、それも一つの経験だ。」という度胸は賞賛にあたいする。不安にもかかわらず、綿密に計画をたてる。ルートをさがし、情報をえる。ビザの期限にまで気をくばって、サイゴンを出発したときには、同行者をえている。ラオス国境に達する。哨兵の「ササゲ、銃」の礼とともに遮断機がスルスルとあがる。悠揚せまらず答礼してとおりにすぎる。とラオスであつた。なにかトリックをつかったかのようなのだが、実は出国手つづきも、税関検査もすんでいないことを気にしているのだっ

た。ラオス国軍の国境警備屯田兵が旅券の検査をすませたとき、「ところで、あなたがたはこの国の人か」ときいた。一行は、心のそこからおどろき、兵士たちが文盲であることをしる。けれども、これっぽちも兵士たちを軽蔑したりはしない。逆に兵士たちの旅行者に対する親切さと、善意を理解するのである。

ラオス人やベトナム人は、国のなかでたたかっている。北ベトナムの鉱産資源、南の農産物、勤勉な国民の能力があるにもかかわらず、南北分裂はすべてをさまたげている。著者のなげかけた疑問はまだ解決されてはいない。

著者らのはじめての調査旅行、1957年に日本政府があたえた外貨枠は1人1日4ドルであつた。テープコーダーと銃を輸入するのにタイ政府税関では、1か月の期間を要した。バンコックを出発する日、ゆううつよさようならとよろこびいさむのだった。いわゆるタイ通のいう「タイの旅行は、おなじ景色ばかりでつまらない」に反撥し、広大な景観が、雄大に変化するのを、自らの目でたしかめ、かぎりない満足をおぼえる。

移動図書館と名づけ、必要な文献を車にもちこみ、観察したことを正確に知識として整理しながら旅行はつづけられた。

人間に対し、かぎりない愛情をもちながらも、冷静な被観察者となりうること、慎重に、そして大たんじくことをはこぶなど、著者のフィールドワーカーとしての態度にはまなぶべき点がおおい。

旅行中の経験や観察をならべたものでなく、著者の解釈や考えかたを述べ、各国の歴史にもふれるなど、たくみな紀行文でおもしろく読ませながら、現在世界的な注目をあびるインドシナ半島をうきぼりにしている。欲をいえば、著者が参照した文献の解説のようなものがほしい。地域研究を志すものならば、いちどは目をとおしておきたい。

(荻野和彦)